

留学生への対応

平成23年3月11日(金)東北地方を襲った東日本大震災により、本学においてもさまざまな形で、危機管理の必要性・再認識が求められるところである。

震災時、本学に在学していた留学生の安否確認については、電話・インターネットなどのインフラが使用不能となり、事務職員だけによる場合、相当の時間と労力を要し、今後の連絡体制などの仕組みに、不安を感じざるを得なかった。

当時本学に在籍していた留学生は、私費留学生9人・温州大学からの1年間の交換留学生3人の計12人であった。

幸いにして本学留学生が、怪我もなく全員無事であったことは、留学生自身による連絡方法の構築、地域住民の方々の献身的なサポートなくしてはありえなかったのかもしれない。

たとえば、温州大学留学生3人については、住居を選ぶ際、大学事務担当が管理人と連絡を密にとり、どのような学生が、どのような目的で来日するかを詳細に打ち合わせしていたため、地震発生直後速やかな避難行動(消防署へ避難)をとることができた。

当該学生の居住マンションは、地震後に襲来した津波により、3日の間1m以上も冠水しており、管理人の速やかかつ適切な誘導がなければ、孤立状態

となったことは言うまでもないことである。

仮に、孤立してしまった場合は、水道・ガス・電気のライフラインが寸断されていたため、大変なストレス状態の中で体調を崩す者が出た可能性も否定できない。

さらに幸いだったのが、震災直後教員・職員の避難者が消防署を目指したことである。消防には相応の設備があり、大学からでも歩いていける距離にあったため、市内の状況を見に行った担当者が、いち早く避難学生とコンタクトをとることができた。

また、私費外国人留学生については、震災時大学にいた者3人、石巻の自宅にいた者4人、仙台にいた者2人で、大学および石巻市内で被災した者が、専修大学北海道短期大学からの編入学生であったため、比較的早く安否確認できた。その際大学にいた3人の者の連絡網が大変に役に立った。

しかしながら、仙台で被災した2人については、確認にかなり手間取ったことは否定できない。

以上が、震災時留学生の安否確認の状況であるが、石巻で被災した留学生たちの協力がなければ、さらに困難な状況となったことは、簡単に推測できることである。

また、ふだんから、留学生交流会と称し、節目ごとに教員・事務職員と会合を持ち、顔見知りになり、時

にはよき相談相手になっていたことは、今回の安否確認の速さの、重要なファクターであったと強く感じた。



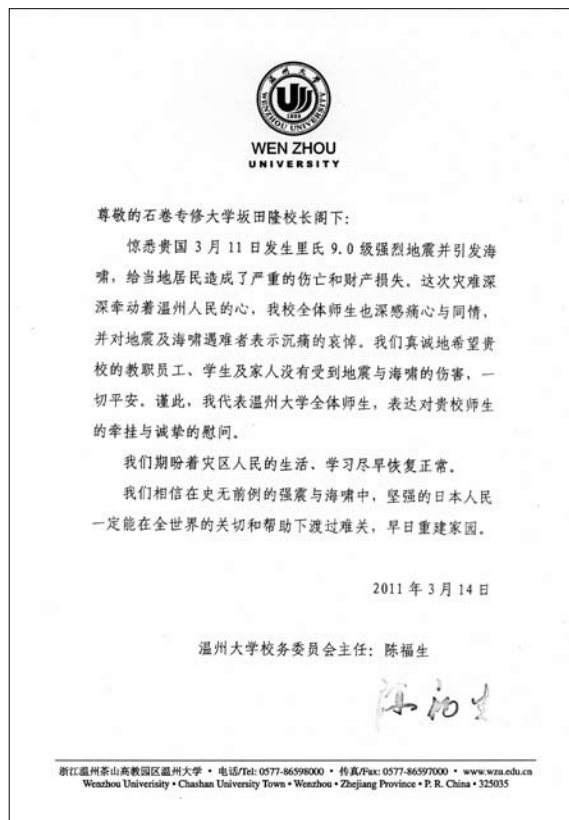
夏期短期研修生受入プログラム①



夏期短期研修生受入プログラム②



交換留学協定校 温州大学にて



尊敬する石巻専修大学・坂田隆学長先生

貴国で3月11日に発生したマグニチュード9.0の巨大地震及び津波のため、当地の人びとに深刻な死傷、財産損失の被害をもたらしたことを知り、驚いております。このたびの災難は温州人民の心を深く揺り動かしました。本学の全教員・全学生も深く心を痛め同情しており、また地震・津波の被害者に沈痛なる哀悼の意を表しております。我々は貴学の教職員、学生及びご家族が地震と津波の被害を受けることなく、一切が無事であるよう心より希望しています。ここに、全温州大学を代表して、貴学の教職員、学生の皆さんに対する心よりのお見舞いを申し上げます。

我々は被災地の人びとの生活や学習が一刻も早く正常に戻るよう待ち望んでおります。

史上例を見ない巨大地震と津波の中、粘り強い日本国民の皆さんが、全世界の関心と援助の下、必ず難局を乗り越え、一日も早くふるさとを復興することができるかと信じています。

2011年3月14日

温州大学校務委员会主任 陳 福生

1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会などの対応・動向

6 建物と地盤について

7 震災を振り返って

資料編